

日本とアメリカにおいて、大学に対する学生の捉え方に大きな差があるわけではありません。「より良い職業に就くためにより良い大学に行く」「そのために高校時代に勉強する」それが良いか悪いかは置いておいて、日米間の学生における根本的な大学の位置づけは変わらないのです。そして、教員の留学経験者の増加はもちろん、外国人講師の増加も伴い、日本にいながら海外のような積極性を求められる授業も多くあり、内面的な部分では相違点は減りつつあります。そのため、目につきやすい相違点だけでなく、類似点にも目を向けてあげることで、似て非なるものというイメージは固定観念ということが分かります。依然として客観的な部分では大きく異なっていますが、単純比較することはできず、日米間の様々な相違が結びついていることも少なくありません。



では、異なっている点に目を向けることにしましょう。アメリカの大学は郊外に作られることが多く、敷地は非常に広大で、多くの学生が基本的に大学の敷地内の寮やアパート、もしくは近隣のアパートに住んでいます。また、大学の教員や職員も大学の敷地内に住んでおり、大学周辺ではアパートや寮、戸建の家が数多く見られます。大学構内の生協も非常に大きく、充実しており、大学周辺にはスーパーやレストランも自然と集まり、自然と一つの街を作り上げていきます。広大な敷地が郊外に余っているアメリカだからできることであり、日本では、特に都市部では考えられないことです。

また、広大な敷地に各校一万五千人から二万人の学生が在籍するため、図書館の数も非常に多く更に、分野により細分化されています。また、図書館の中には勉強用の机はもちろん、個人の使用やディスカッションの準備等に使用を限定される「Study Room」という個室が数多くあり、設備面からも学生の勉強に対する姿勢を伺い知ることができます。

勉強の話になりましたが、アメリカの大学では、週二回から三回ある授業を三種類から四種類選択し、そこにディスカッションの授業が週一回で組み込まれます。日本のように数多くの授業を少しずつ学ぶのではなく、学ぶと決めた限られた教科を徹底して学ぶというのがスタイルのようです。そのためトランスでは、自分の専門と将来やりたいことに関係があることが当然であり、大学で学んだことを生かした就職ということを考えています。

上記のように客観的な設備やシステムには相違点が見られ、それが地理的要因によるもので日米の根本的な違いから生じたものであることもあれば、各々の大学に起因する部分が大きかったりと理由は様々です。たとえば、アメリカの学生の学習する科目の種類が少ないということは大学から新たに始まったことではなく、高校の時間割が毎日同じということからも分かるように、限られた教科を深く学ぼうとするアメリカの教育姿勢の表れだと思います。

自分が興味のある限られた教科を深く勉強できるということ、そして課題が多い為かたくさんの方が当たり前のよう勉強しているという環境に、新鮮さを感じ、「そこで勉強してみたい」という興味を抱かせるような場所でした。